

主 題：教会のあるべき姿 = 成長②
聖書箇所：エペソ人への手紙 4章4－6節

テーマ：聖書の教える教会のあるべき姿とは？

今朝皆さんとともに見たいみことばは、前回の続きエペソ4:4－6です。聖書をお持ちの方はどうぞお聞きください。そして聞きながら、先週、エペソ4:1－3を通して、私たちが学んだことを少し思い出してみてください。教会というテーマについて土台と使命を見た私たちは、先週から教会として成長することについて考え始めました。主によって召され、同じ土台、同じ使命を持って生きている私たちには個人としてだけでなく教会としてともに成長し、主に喜ばれる集まりと変わり続けていく責任がありました。

○教会が成長するために：一致すること

1. 一致を保つために欠かせない前提 1節
2. 一致を保つために欠かせない態度 2－3節

そして、その成長のためにまず何よりも欠かせないものとしてパウロが記していたことが一致することでした。聖書が教える教会の姿として私たちがあり続けるためには、それぞれがいろいろな奉仕や働きをすることや霊的なリーダーを中心として教会の体制を築き上げていくことも大切なことです。実際パウロはそのことについてもこの後の4章の中で記しています。しかし、教会の成長を考える上で、私たちにとって何よりも大切なことは、私たちがどんなことをするのかよりもどんな態度でもって、どんな心で互いに仕え合っていくかです。だからもし私たちが救われた者にふさわしい態度——謙虚になって柔和な心を持ち、愛を動機として互いの間で忍耐を示そうとしないのであれば、どんなに素晴らしいことを考え、行っていたとしても、一見外から見れば問題のない教会に見えたとしても、その教会はいずれ内側から崩壊してしまいます。性別や年齢、国籍や文化、性格や価値観、育った環境もさまざまな者が神の家族としてともに生きていこうとすれば、私たちそれぞれが一致を保つことを熱心に求めていかなければいけません。確かにそれには難しさが伴いますが、私たちがいろいろな犠牲を払ってでも主によって与えられたこの一致を求めて行かなければ教会として成長していくことなど絶対にできません。

そして一致するということはイエス様自身も望まれていることでした。ご自分が十字架にかかる前に最後の晩餐を弟子たちとともに過ごされたイエス様は、このように祈っておられました。その祈りがヨハネ17:20－21に記されています。「わたしは、ただこの人々のためだけでなく、彼らのことばによってわたしを信じる人々のためにもお願いします。それは、父よ、あなたがわたしにおられ、わたしがあなたにいますように、彼らがみな一つとなるためです。また、彼らもわたしたちにおるようになるためです。そのことによって、あなたがわたしを遣わされたことを、世が信じるためなのです。」と。主は確かにこの時弟子たちのために祈られていました。しかし、それに加えて「彼らのことばによってわたしを信じる人々のため」、言いかえれば、弟子たちが語り伝える福音によって、福音を信じ救われるすべての人々、主のために今を生きる私たちひとりひとりのためにも主は祈ってくださったということです。では主はどんなことを祈られていたのでしょうか？それは私たちがみな一つとなること、主にあって一致することでした。

こうしたみことばを通して言えることは、パウロだけでなくイエス様までもが救われた私たちが一致していくことを求めていくようにと教えていました。もちろん一致を目指すことは簡単なことではありません。私たちはいろいろな人と歩みをともしていきます。そして私たちのうちにはさまざまな違いがあるからこそ、そこにすれ違いや争い、また不一致といったものが生まれてくることがあります。例

例えば性別が違えば、それだけで大きな難しさになります。結婚されている方はより意味がわかるはずで、男女間では物事に対する考え方が違ったり、またコミュニケーションの方法も違ったりします。そんな意味で言ったわけではなかったのに、そういった誤解から争いが生まれてしまうことがあります。また年代が違えば、そこにはジェネレーションギャップも存在します。また私たちも罪の性質を持って生きているからこそ、プライドによって自分の思いを優先したり、自分と合わない人とかかわらないようにしようとすることもあります。教会の中でも同じことです。奉仕や働きをしようとするにもそれぞれに意見や思いがあります。それを押し通そうとする人もいれば、一歩引く人もいます。でも一歩引いても実は心の中でさまざまな不満を抱いていたりします。また敵であるサタンも、私たちが一致をしないようにと日々働いています。私たちはこのような戦いがある中で、一致を保っていくことが求められています。私たちにとってこれは間違いなくチャレンジです。でもみことばが教えていることは、主に召された私たちはその召しにふさわしく、みずから進んでみことばを實踐し、そのことを通してますます主に喜ばれる教会として変わっていかねばいけないということです。でも同時に、私たちにはそのことが可能なのだと、パウロはエペソの1節から繰り返し教えていました。

3. 一致を保つために欠かせない七つの要素 4-6節

パウロは4-6節でも改めて一致を保っていくことは可能なのだと教えています。きょうは、一致を保つために欠かすことのできない七つの要素をこのパウロの**ことば**から見ていきます。パウロはここで七度にわたって「一つ」ということばを繰り返していました。私たちが一致して歩んでいくためには、これら七つの共通点をいつも覚えておく必要があると教えているのです。私たちは一つなのだ、そのことをよく思い出さないと。これからみことばを見ていくのですが、このみことばと自分自身の歩みを照らし合わせて、よく心を吟味してみてください。そして主に喜ばれる神の家族として、私たちがどれだけ同じ一つの基盤に今立っているのかをよく考え、覚えて、私たち互いの間でますます一致を保つ、そんな教会として成長していきましょう。

では、まずみことばをお読みします。私たちが見るのは4-6節ですが、1節からお読みします。

エペソ4:1-6

「:1 さて、主の四人である私はあなたがたに勧めます。召されたあなたがたは、その召しにふさわしく歩みなさい。:2 謙遜と柔和の限りを尽くし、寛容を示し、愛をもって互いに忍び合い、:3 平和のきずなで結ばれて御霊の一致を熱心に保ちなさい。:4 からだは一つ、御霊は一つです。あなたがたが召されたとき、召しのもたらした望みが一つであったのと同じです。:5 主は一つ、信仰は一つ、バプテスマは一つです。:6 すべてのものの上にあり、すべてのものを貫き、すべてのもののうちにおられる、すべてのものの父なる神は一つです。」

聖霊なる神様のみわざ

a. からだは一つ 4 a 節

さて、教会が一致を保つために欠かすことのできない一つ目の要素は、4節の最初に「からだは一つ」と書かれていました。これは言いかえると、救われた者はみな例外なく一つのからだに属しているということです。私たちは一つのからだにあって一致しているとパウロは言っています。もちろんこのからだとはキリストをかしらとする教会のことを指しています。パウロは教会がキリストのからだであるという描写をエペソの中でも、また新約の中でも繰り返し用いていました。エペソ1:22-23に「また、神は、いっさいのものをキリストの足の下に従わせ、いっさいのものの上に立つかしらであるキリストを、教会にお与えになりました。:23 教会はキリストのからだであり、いっさいのものをいっさいのものによって満たす方の満ちておられるところです。」と。また続いて2:16にも「また、両者を一つのからだとして、十字架によって神と和解させるためなのです。敵意は十字架によって葬り去られました。」とあります。つまりキリストによって救われた者はだれでも、どの時代であっても、世界中どんな場所であったとして

も、人種やことば、文化や年齢、性別といったものに関係なく、キリストのからだの一員とされているということです。もっと言えば、キリストによって新しくされた私たちは、実際に建物が存在するこの地域教会に属する以前に、目に見えない霊的な共同の教会に属しているということです。同じ一つのからだに召されているからこそ、私たちは互いの間で一致を保つことが必要になるのです。

パウロは同じからだに属する者として生きて行くことについて、コリントのクリスチャンたちに教えていました。コリントの教会の人々はさまざまな問題を抱えていました。彼らの教会の中には分裂や不一致といったものが起こっていました。私はアポロに、私はパウロに、私はケパにつくと自分の望む思い思いのリーダーに従おうとして、彼らの間には対立や争いが起こっていました。一つのからだである教会の中にさまざまなグループが乱立していたのです。彼らは教会が一つのからだであるにもかかわらず、まるで教会が自分たちのものかのように考え、振る舞っていました。それだけでなく、コリントの教会の人々の中には、人に仕えることよりも自分の得になることを優先し、本来人に仕えるために与えられた賜物を自分のために用いているような、そういったプライドといった問題も存在していました。彼らは自分がよければいいのだと言って、ほかの兄弟姉妹に関心を払おうとしなかったのです。一つのからだに召された者であるにもかかわらず、彼らはバラバラな群として生きていました。

だからパウロは彼らに言います。兄弟たち、あなた方は誇り高ぶって別々に歩いてはいけません。あなた方のすべてはキリストのものであり、そして教会に属するものはみな一つのからだとして生きているのだと。ですからパウロはIコリント12:12-13で「ですから、ちょうど、からだ一つでも、それに多くの部分があり、からだの部分はたとい多くあっても、その全部が一つのからだであるように、キリストもそれと同様です。なぜなら、私たちはみな、ユダヤ人もギリシヤ人も、奴隷も自由人も、一つのからだとなるように、一つの御霊によってバプテスマを受け、そしてすべての者が一つの御霊を飲む者とされたからです。」と記しています。私たちがここで覚えなければいけないことは、教会というのは単なる人々の集まりではなく、キリストによって、御霊の働きによって一つのからだとされた者たちの集まりだということです。私たちはバラバラではなく、一つのからだに属しています。教会に属する者はどんな人であったとしても同じキリストのからだを立て上げるその一つとされているのです。

だとすれば、同じからだに属するほかの兄弟姉妹をどのように扱うのかはとても重要なことです。あの兄弟は自分とは違うからとか、あの人と私は合わないからと言って、その人を切り捨てたりするのでしょうか？自分の思いどおりにさせてくれないような人は私には要らないと言って、そういった人から距離を取ったり、無関心を装ったり、また逆にゴシップや噂話を流して、そういった人を攻撃しようとするのでしょうか？パウロは同じコリントの中ではっきりとこう言っていました。「しかしこういうわけで、器官は多くありますが、からだは一つなのです。そこで、目が手に向かって、「私はあなたを必要としない。」と言うことはできないし、頭が足に向かって、「私はあなたを必要としない。」と言うこともできません。」、Iコリント12:20-21です。キリストのからだに属する各器官はみなそれぞれに違った働きがあり、そしてそれらすべてがからだにとってなくてはならないものです。だからこそ私たちはどんな兄弟姉妹に対しても、その人たちの働きを過小に評価したり、またないがしろにするようなことがあってはならないということです。

ここで忘れてはならないのは、主は私たちに永遠の命を与えるためだけにご自分のいのちを犠牲にして、十字架の上でその血を流してくださったのではありません。先ほど見たエペソ2:16に「また、両者を一つのからだとして、十字架によって神と和解させるためなのです。」とありました。どういうことかという、主は私たちが神と和解させ、この主を信じる者たちが一つのからだに召されて、その者の間で一致を保っていくために十字架の上で死んでくださったということです。だからもしほかの人との間にそういった争いがあるのであれば、今自分がしていることは、私のために死んでくださった主を喜ばせることなのかどうかと自分自身に問いかけることです。今自分が相手に対して抱いているような思いや

感情は、同じキリストのからだに属する者と一致を保っていくのにふさわしいものなのかどうか——。私たちは同じキリストのからだに属する者として互いに支え合って生きています。このからだに属する者の中でだれひとりとして必要のない存在はいないのです。みなそれぞれに役割があり、みなそれぞれに働きがあります。それにもかかわらず、もし私たちがあの人には必要ないと勝手に教会から切り捨てているのであれば、自分の中から排除しているのであれば、それは主の前にどんなに愚かなことをよく考えなければいけません。

また、私たちは同じからだに属しているからこそ、からだの一部が傷つけばからだ全体に影響を及ぼします。私たちのうちのひとりの人が傷つけば、ほかのすべての人もそのことで同じように傷つきます。だからもし私たちのうちで問題が起こっているのだとすれば、それは実はその人たちの間だけに起こっている問題ではなく、からだ全体にかかわる問題だということです。だからこそ私たちはまず召された者にふさわしい態度を持って、兄弟姉妹の間で起こっている争いや問題を解決することです。私たちは一致を保つことを熱心に求めていくことです。私たちはキリストのからだにあって一つとされたのだからこそ一致を保っていかなければいけないし、同時に一致を保っていくことができるのです。

b. 御霊は一つ 4 b 節

また、パウロは二つ目の要素として「御霊は一つです」と言っていました。言い換えれば、救われた者はみな同じ聖霊なるの働きによって救われ、同じ聖霊なる神様が与えられているということです。この「御霊」の働きによって一つとされているのです。私たちは聖霊なる神様が私たちのうちに働いてくださったことによって救いへと導かれました。生まれながらに罪の中に死に、だれひとりとして神を求めていなかった私たち、創造主を無視して自分のために生きていることに何の問題も感じていなかった私たちは、ただ滅びへとまっすぐに進んでいました。私たちは主の御怒りをただ自分の上に積み上げている存在だったのです。そしてそのことが間違っているということにだれひとりとして気づく者はいませんでした。しかし、恵みによって聖霊なる神様が私たちのうちに働いてくださったからこそ、私たちは自分がいかにきよい神様の前に愚かな存在なのか、どんなに救いを必要とする罪深い存在なのかを知ったのです。そしてそのことに気づいた私たちは自分のこれまでの生き方を悔い改めて、イエス・キリストを自分の救い主として信じ受け入れ、この方にすべてを捧げる新しい歩みを始めたのです。

こうして神の国に入ることなど到底できなかった私たちを新しく生まれ変わらせ、救いへと導いてくださった。それはこの聖霊なる神様の働きによってでした。パウロはテトス3:5-6で「神は、私たちが行なった義のわざによってではなく、ご自分のあわれみのゆえに、聖霊による、新生と更新との洗いをもって私たちを救ってくださいました。神は、この聖霊を、私たちの救い主なるイエス・キリストによって、私たちに豊かに注いでくださったのです。」と言っています。そして今、救われた私たちに与えられた聖霊によって証印が押され、聖霊によって「アバ、父」と祈ることができ、聖霊によって同じ御霊の実を持って生きて行くことができ、聖霊によってみことばを理解し、みことばに従っていくことが可能になったのです。

救われた私たちのうちには例外なくこの同じ聖霊なる神様が与えられ、私たちは同じ御霊を持っているのですが、私たちが兄弟姉妹とともに歩んで行く時、そこには確かにいろいろな違いがあります。ある時は霊的にまだまだ幼く、愚かなことを何度も何度も繰り返すような人と向き合わなければいけないかもしれません。自分が何度愛を持って丁寧に接したとしても、その人はあなたのことを傷つけるかもしれません。皆さん、そんな時どうしますか？何度言っても変わらなければ、私たちは諦めてしまったり、逆に何度言ってもわからないからと怒ってしまったりすることがあります。でもその時に私たちが覚えておかなければいけないことは、私たちのうちには同じ御霊が与えられているということです。私たちにどれだけ知恵があろうとも、どれだけことば巧みであろうとも、私たちのうちには人を変える力はありません。でもそれができる聖霊なる神様がともにいてくださるのです。その人にその御霊が与え

られているからこそ、たとえその人がどんな人物であったとしても変わることができます。私たちはそのことを期待することができるのです。同じ御霊が与えられているからこそ、私たちは忍耐を持って互いに接することが大切になるのです。私たちはみな同じ御霊が与えられ、御霊にあって一つとされたのだからこそ、私たちはこの御霊にあって一致を保っていかねばいけないうし、保っていくことができるのです。

c. 望みは一つ 4 c 節

三つ目に挙げられている要素は望みは一つだということです。パウロは「召しのもたらした望みが一つであったのと同じです。」と言っていました。要するに、救われた者はみな同じ希望のうちの一つとされているということです。私たち救われた者は同じ希望を持っているのです。同じ希望を持つ兄弟姉妹と私たちは今ともに歩んでいます。救われる以前の私たちはみなこの世にあって、希望のない者としてさまよい歩いていました。エペソ 2:12にも「そのころのあなたがたは、キリストから離れ、イスラエルの国から除外され、約束の契約については外国人であり、この世にあって望みもなく、神もない人たちでした。」と言っています。神様から離れていた私たちには自分の将来がどうなるかもわからず、いろいろなものに期待をして、自分の思いどおりになることを願ってさまざまな計画を立てても、それが裏切られてしまったり、裏切られたことによって悲しみを覚えたりすることを多々経験しました。確固たる確信がないからこそ周りに起こるさまざまなものや状況の変化によって心が揺さぶられるようなことが起こっていました。また、何より私たちを待っていたのは、自分の罪の罰を受け、永遠のさばきを地獄でただ受け続けることだけでした。そこには文字どおりいっさいの希望などなかったのです。

しかし、そんな希望がなかった私たちを主が恵みでもって、キリストによって召し、主の救いのすばらしさを教えてくださいました。恵みによって救われ、本来受けるべきだった罪に対するさばきから私たちは解放されたのです。そしてそんな私たちは今、何があっても変わることのない主に希望を見出しながら生きて行くことができます。私たちは同じ希望を持っているのです。確かに今の歩みにあっては、罪や誘惑との戦いがあり、それに負けてしまうことがあります。でもそれはいつまでも続くことではないと私たちは知っています。私たちは必ずいつ日か主がこの地上に帰って来られることを、私たちが主にお会いするその時に、私たちのからだは罪や汚れのいっさいない栄光のからだへと変えられる日が必ずやって来ることを固く信じているのです。何の痛みも苦しみもない、そのような中で主とともに永遠を過ごし、このすばらしい方に賛美を捧げ続ける、そのような日がやって来る。私たちはそんな希望を主にあっていただき、そのような確信を持ってきょうを生きて行くことができるのです。救われた者はみなこの同じ希望を持ってきょうをともに歩んでいるのです。

皆さん、主に召された者はみな、同じ希望を持って同じ目標を目指して今を走っています。パウロが言っていたように、キリスト・イエスにおいて神の栄冠を得るために、私たちはみな目標を目指して一心に走っているのです。だとすれば私たちは同じ希望を持って、同じ目標を目指している兄弟姉妹の歩みを妨げるようなことをするべきなのでしょう？それとも励まし合いながら支え合ってともにゴールを目指して行くべきなのでしょう？私たちは互いの中で一致を目指すことによって、同じ希望によって一つとされた者として、ともに生きて行くのです。だからこそこの希望にあって一致を保っていかねばいけないうし、同時に一致を保っていくことができるのです。

御子なる神様のみわざ

d. 主は一つ 5 a 節

四つ目に挙げられている要素は5節「主は一つ」だということです。言いかえれば、救われた者はみな主であるイエス・キリストのうちの一つとされているということです。

ここで少し注目していただきたいのは、パウロは4節で「からだは一つ、御霊は一つ」、望みは一つと、聖霊なる神様のみわざを中心に語っていましたがけれども、5節では御子なるイエス・キリストのみ

わざ、そして6節では父なる神様のみわざに触れているということです。つまりパウロは教会の一致というものを保つ上で、三位一体の神様に基づくことが大切だと強調しているのです。

パウロは「主は一つ」だと言いました。そのことばどおり、私たちはイエス・キリストを自分の主人として、この方に仕える奴隷としてきょうを生きています。この方こそが私たちを神の家族へと招き入れてくださった唯一の救い主だと私たちは信じているのです。エペソ2:18-19でもパウロは「私たちは、このキリストによって、両者ともに一つの御霊において、父のみもとに近づくことができるのです。こういうわけで、あなたがたは、もはや他国人でも寄留者でもなく、今は聖徒たちと同じ国民であり、神の家族なのです。」と言っていました。私たちはこの主イエス・キリストが唯一の道であり、真理であり、いのちであることを、そしてこのお方を通してでなければ救いがどこにもないということを知っています。だからこそほかのどんな教えに耳を傾けるよりも、キリストのことばにのみ心を向け、そしてこの方にすべてをゆだねて、この方が喜んでくださることを追い求めていこうとするのです。そしてこの主によって召された者はみなそれがどんな人であったとしても、同じ主を愛する者として今を歩んでいるということです。

だとすれば、ほかの兄弟姉妹に対して私たちはどのように向き合っているか、少し考えてみてください。もしだれかが「私は自分の主人のことを心から愛しています、この主人に言われることなら何でもします」と言いながら、「自分と同じ主人に仕えるほかのしもべは意見が合わないのかかわりたくありません」、もしそのように口にたとすれば、その人にどうということばをかけるでしょう？また、私たちがよく知っているとおりに、私たちの主人であり、師であるイエス様ははっきりとこのように命じておられました。ヨハネ13:34-35で「あなたがたに新しい戒めを与えましょう。あなたがたは互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、そのように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。もしあなたがたの互いの間に愛があるなら、それによって、あなたがたがわたしの弟子であることを、すべての人が認めるのです。」と。主人であるイエス様が互いに愛し合うことを私たちに求めておられました。そしてこれこそが主の弟子として歩む者にふさわしい態度なのです。私たちが覚えておかなければいけないことは、もし私たちが互いに愛し合うことを拒み、争いや分裂をそのままよしとし続けるのであれば、いつまでも相手を赦さないのであれば、それは主の命令に背いているということです。

またそれだけでなく、たとえその人が主は自分の主人だと口では言っていたとしても、その人は本当の意味ではそのことを理解していないということになります。なぜなら私たちの主人であるお方は、神であるにもかかわらず、何の価値もない私たちのためにみずから進んで仕える者としてこの地上に来られ、十字架の上で死んでくださったからです。主は大きな犠牲を払って私たちを赦してくださった。アイザック・ワッツはこのように言っていました。「あの十字架を思うと、栄光の君が死んでくださったあの十字架を思うと、自ら得た最高のものすら価値のないものになり、また誇るものなど何もありません。」と。私たちはこのような思いを持って互いに接しているのでしょうか？もし私たちが頑なに自分というものをもち続けるのであれば、平和を保つことも、赦し合うことも絶対にできません。しかし、私たちの主であるイエス様は犠牲を払って私たちを赦してくださいました。この方のしもべとして生きている私たちが自分を捨てて、この方の模範にならって生きて行くのであれば、私たちはそこに一致を見出すことができます。私たちがあの十字架を思えば、私たちのうちには誇るものなど何一つありません。私たちはみなこの同じ主にあって一つとされた者です。だからこそこの主に従う時に、この主の十字架を私たちが覚える時に、私たちは一致を保っていかなければいけないし、同時に一致を保っていくことができるのです。

e. 信仰は一つ 5b節

五つ目に挙げられている要素は「信仰は一つ」だということです。言いかえれば、救われた者はみな信仰によってのみ救われるという、この同じ福音の教えにあって一つとされたものだということです。

かつての私たちを思い出せば、私たちはみなきよく正しい神の前に有罪と認められるような罪人でした。この世には主の前に正しいと認められる義人はただのひとりもいませんでした。自分の努力でどれだけ正しい行いを積み上げたとしても、たとえそれが人の目にはすばらしいものに見えたとしても、決して主の完全な基準を満たすことのできません。私たちはその罪の罰をただ受けることにしか値しない存在として生きていました。しかし、そんな私たちにはどうすることもできなかった罪の問題を、神様ご自身がイエス・キリストをなだめの供え物として、私たちの代わりに十字架につけてくださることによって解決してくださったのです。この主が私たちのすべての罪と咎を負って犠牲となってくださったからこそ、この方を信じるすべての者を神様は義と認めてくださいました。パウロはエペソ2:8-9で「あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によって救われたのです。それは、自分自身から出たことではなく、神からの賜物です。行ないによるものではありません。だれも誇ることのないためです。」と記していました。過去にどのようなものであったのかとか、どのようなよいことを私たちがしたのかとか、そういったことではなく、私たちはただ主の恵みによって、主のあわれみによって救われたのだ、救いを得させる神の力であるこの福音、この主を信じる信仰の上に私たちは一つとされ、今立っているのです。私たちはこの同じ福音によって新しいいのちが与えられ、新しい歩みをしていくことが可能になったのです。

私たちはこの恵みによって救われたのであれば、私たちはこの恵みをいつも覚えて、それにふさわしい生き方をしているでしょうか？私たちは恵みによって救われたにもかかわらず、救われた後、自分がいかにすぐれているのかとか、どれだけ自分が人より勝ってるのかといったことを誇っていたりはしないでしょうか？人と自分を比べて、自分の方が知識を持っているからとか自分の方が経験があるからとか、自分の方が能力があるからと言って周りの人の考えや思いをないがしろにはしていないでしょうか？私たちには何も誇ることはありません。私たちは恵みによって救われて、恵みによって今を生かされています。私たちはみな同じ信仰にあって一つとされ、だからこそただ信仰によって、恵みによって救われたことを私たちが覚える時に、一致を保っていかなければいけないし、保っていくことが可能なのだと教えられています。

f. バプテスマは一つ 5c節

六つ目に挙げられている要素は「バプテスマは一つ」だということです。ここで「バプテスマ」ということばが出て来ていますが、これが何を意味するのかについてはさまざまな考え方があります。ある人はこれは水のバプテスマだと考えています。そして確かに初代教会の時代からキリストの名によって人々が救われたことを象徴する証としてバプテスマが行われていました。また私たちが以前も見たようにバプテスマを授けるということは主ご自身が教会に与えた大命令の一つでした。ですからここを水のバプテスマと取ったとしても間違っていないと思います。また、ここでのバプテスマを聖霊のバプテスマだと取る人もいます。そして恐らく文脈から考えて、私自身はこちらの方がより適切ではないかと思えます。それは、この4-6節の内容を見た時に、パウロは繰り返し救われた者たちの内側の話、彼らがどのような者に変えられたのかについて記していて、礼典や儀式といった形式的な外側の話をしていないように見て取れるからです。

つまりここでパウロが言わんとしたことは、私たちはみな救われた瞬間に例外なく聖霊の働きによってキリストとともに十字架につけられ、キリストのからだの一つとされる、そんなバプテスマを受けたのだということです。私たちはこの御霊のバプテスマによって一つとされているのだと。先にも見たIコリント12:13でパウロは「なぜなら、私たちはみな、ユダヤ人もギリシヤ人も、奴隷も自由人も、一つのからだとなるように、一つの御霊によってバプテスマを受け、そしてすべての者が一つの御霊を飲む者とされたからです。」と記していました。ですからキリストを信じて罪を赦されたすべての者は、同じ御霊によって、同じキリストにあって一つのバプテスマを受け、そしてキリストのからだである教会に属する者へと変えられました。私たちは同じキリストの死にあずかるバプテスマを受け、そしてキリストと

もに葬られ、再びキリストにあって新しい歩みをする者として一つとされたのです。だからこそ私たちは互いの間で一致を保っていかなければいけないし、私たちは一致を保っていくことが可能なのです。

父なる神様のみわざ

g. 父なる神は一つ 6節

そして最後に、教会が一致を保っていく上で欠かすことのできない七つ目の要素が6節の中に記されています。パウロはここで「すべてのものの上にあり、すべてのものを貫き、すべてのもののうちにおられる、すべてのものの父なる神は一つです。」と言っていました。七つ目の要素は「父なる神は一つ」だということです。言いかえれば、救われている者はみな同じ父なる神様を持ち、同じ神様を「アバ、父」と呼ぶ、そんな神の家族に加えられたということです。私たちは同じ父を愛する神の子供とされているからこそ、互いのことを兄弟姉妹と呼び合い、互いに仕え合うことを通して神の家族として成長することを目指していくのです。もちろんこれまでも繰り返し見ているとおり、私たちのうちにはさまざまな違いがあります。でもここにあるように、私たちは同じ一つのからだを持ち、一つの御霊を持ち、一つの望みを持ち、一つの主を持ち、一つの信仰を持ち、一つのバプテスマを持ち、そして同じ一つの父なる神様を持って今を生きているのです。こんな共通の要素を私たちはもう既に与えられている。私たちにこのような共通の基盤が与えられているからこそ、私たちは教会として、神の家族として、平和のきずなで結ばれて御霊の一致を熱心に求めていくことができるのだとパウロは教えています。

最後に、ここでパウロが繰り返していることばに少し注目してみてください。彼は6節で父なる神が「すべてのものの上に」あること、「すべてのものを貫く」こと、そして「すべてのもののうちにおられる」ことを述べていました。まず父なる神が「すべてのものの上に」あるというのは、この神様がすべての主権者であること、すべてを思いのままにご自分の目的に従って成し遂げられるお方だということです。

次に父なる神が「すべてのものを貫く」というのは、この主権者なる神様が単にすべてのことを支配されているだけでなく、私たちのうちに働いてご自分の目的のためにそれぞれを用いられるということです。そして最後父なる神が「すべてのもののうちにおられる」というのは、神が私たちといつもともにいてくださるということです。こんな父なる神様が私たちとともにいてくださっているのです。救われている者はみな同じ父なる神様を、一つの父なる神様を持っているのです。

だとすれば、私たちはどんな態度で一致を追い求めていくべきなのでしょう？ これまでも見てきたように、さまざまな違いを持っている人々の中で、一致を保っていこうとすることは簡単なことではありません。すれ違いが起こったり、誤解があったりして争いが起こるようなこともあります。私たちはそのような場面に直面すれば、落ち込んでしまったり、逃げ出したいような思いになってしまうこともあります。しかし、どんな状況もこの父なる神が支配しておられないことはない。もっと言えば、よい時も悪い時も、兄弟との間に問題が起こっていて私たちが苦しい時も、主は変わらずにそれらを通して私たちのうちに働いて、ご自身の栄光を現わそうとされているということです。皆さん、主はご自分が召した者のためにすべてのことを働かせて益とすることができるお方です。そしてこれは、私たちがだれかから傷つけられているような時も、自分とはなかなか合わないような人との関係においても変わることはありません。どんな時もすべてのことを通して主は栄光を現わそうとされるのです。私たちのことを愛し、何よりも私たちが成長していくことを望まれている神様は、そのような試練や難しさを通して、私たち自身の罪を示し、キリストに似た者になるようにと私たちを変え続けてくださいます。主はその助けさえも私たちに与えてくださるのです。問題は私たちがこの父なる神様にすべてをゆだねて、どんな時もこの方に従って一致を保つことを追い求めていくかどうかです。よい時は求めて悪い時は求めないというようなものであってはいけません。主はすべてのことを通して益としてくださる。私たちはみなこの同じ父なる神にあって一つとされました。だからこそこの方が主権者であることを覚え

てこの方に信頼していくことで、私たちは一致を保つことができます。また一致を保っていかなければいけないのです。

〇まとめ

さて、今朝は一致を保つために欠かすことのできない七つの要素を見てきました。私たちは確かにいろいろな面で違いを持っています。性別や年齢、国籍や文化といったようなものも、性格や価値観、育ってきた環境も違います。しかし、キリストを救い主として受け入れた私たちはみな、今同じ一つのからだを持ち、一つの御霊を持ち、一つの望みを持ち、一つの主を持ち、一つの信仰を持ち、一つのバプテスマを持ち、そして同じ一つの父なる神を持って一つの教会、神の家族として生きているのです。私たちがそのような一致を生み出したのではありません。主が私たちのうちに働いて、このような一致を、このような基盤をもうすでに生み出してくださっている。私たちの責任は、熱心に一致を保ち続けていくことです。私たちはこの共通の基盤をいつも覚えて、互いの中で一致を保っていくことが求められています。しかし、私たちがどんな基盤に立っているのかということ、何をもとに私たちが一つとされているのかがあやふやになってしまったり、忘れてしまったりすれば、私たちはそれに代わる何かを探し、その何かにとらわれてしまいます。要するに、私たちが何の基盤にあって一つとされているのかを忘れてしまえば、私たち自身のうちにその基盤を見出そうとするようになるということです。自分自身の基準や自分の価値観、力や能力、経験や習慣といったものに一致を見出そうとするようになるのです。でもそのようなものに一致を見出そうとしても、自分というものに対して一致を見出そうとしても、私たちがそんなものにとらわれてしまえば、そこには一致というものは絶対に生まれることはありません。私たちのうちに一致をするようなものはありません。私たちが一致をすることができるのは、神様が与えてくださった基盤に基づいて生きて行くことです。だから私たちはいつもみことばが教えるその基盤に立ち続けることが求められているのです。

もしきょうのみことばを見てきて、自分はまだキリストにあって一つとされていないという方がおられるのであれば、きょうこのイエス・キリストを自分の救い主として受け入れてください。かつての自分の生き方は悔い改めて、この方を主として生きる、そのような人生をきょうから始めてください。この方はどんな人の心でも変えることができます。またこの方のうちにのみ本当の救いがあります。

今を主のために生きておられる皆さん、私たちはキリストのからだに属する一つの教会、神の家族として今を生きています。私たちは同じ御霊、同じ望み、同じ主、同じ信仰、同じバプテスマそして父なる神を持って今を生きています。私たちに与えられた責任は互いの中で一致を保っていくことです。謙虚になって、柔和な心を持って、そして愛を動機として、互いの中で寛容、忍耐を示し続けていくことです。確かにそれには難しさを伴います。でもどんな状況にあったとしても主の十字架を思い出して、そのわざを覚えて、そして互いの中で平和の一致が保たれることを追い求める、そんな教会としてともに成長し続けて行きましょう。